

2
日米交渉関係

S 14.1.4.0-1

01

N-0034

0292

△ 八五 佛印進駐ノ開スル「ウエリス」公在ノ声明	△ 七二五 若杉「ハニヤシ」ノ會談
△ 七二二 若杉「ウエリス」ノ會談	△ 七二二 佛印進駐ニ對シテノ聲明
△ 七二四 本國國務省ノ日本佛印進駐ニ對シテノ聲明	○ 七二四 野村大使奉天政府ノ會談奉天政府ノ佛印等ノ中立案ヲ提議ス
	奉府奉電
	奉府奉電
	奉府奉電
○ 七二五 佛印進駐「ハニヤシ」大使ニ奉部佛印進駐事ヲ説明ス	
○ 七二二 人ノ上ノ再々説明ス	（覚書ノ本文及其英文）
○ 七二〇 在支米砲艦「ハニヤシ」ノ帰國事ニ奉部ノ政府ノ注意	

	四月十六日 日本文、英文	254
	四月十六日 日英譯解案ノ終了案	255
	四月十六日 日英譯解案ノ終了案	256
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	257
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	258
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	259
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	260
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	261
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	262
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	263
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	264
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	265
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	266
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	267
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	268
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	269
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	270
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	271
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	272
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	273
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	274
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	275
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	276
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	277
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	278
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	279
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	280
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	281
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	282
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	283
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	284
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	285
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	286
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	287
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	288
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	289
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	290
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	291
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	292
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	293
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	294
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	295
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	296
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	297
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	298
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	299
	四月二十一日 日英譯解案ノ終了案	300

N-0034

0293

3

九一三	三浦衛門「ハート」會議談話開スル天竺及「オント」大使會談 覺書
九一四	同上「ハート」大使會議談話覺書 華府宛テ五月十一日 ワシントン五月十三日
九一八	日本向國文調書ニ付テ了解案
九一六	駐日「オント」代理大使を東京に召見シテ三國同盟條約解釋ニ付テ 未説明事項等覺書
九一七	在英「ハート」大使ヨリ三浦「ハート」會見ニ付テ覺書提出
九二四	在英「ハート」大使ヨリ國務省ニ報告シテ郵事變終了後ニ於テ 日本駐英ノ理由説明 覺書

外務省

2

八二八	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八二九	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三〇	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三一	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三二	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三三	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三四	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三五	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三六	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三七	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三八	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八三九	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四〇	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四一	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四二	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四三	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四四	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四五	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四六	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四七	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四八	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八四九	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書
八五〇	駐日「オント」大使ヨリ日本交際使ニ付テ會議談話覺書

外務省

レリノハ...

一〇七
一〇八
一〇九
一一〇
一一一
一一二

大日本帝國大使館

N-0034

0295

在中華民國大日本帝國大使館

一〇一四	米口署... 華府電 九四一〇
一〇一五	與日外相... 華府電 九六七〇
一〇一七	野村... 華府電 九六二〇
一〇一八	同上 華府電 九六六〇
一〇二一	東洋... 華府電 九六八〇

19. 9. 5.000 水村精

N-0034

0296

○二一六	東御大目交野馬大目先 六月廿多 赤宮赤井交野馬 文書八空 赤宮 赤井 赤宮 抄令	赤宮 赤井 赤七四〇号
○二一七	野村甘味赤御大目先 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇五五号
○二一九	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤七五二一〇号
○二二〇	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇六六号
○二二一	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇七〇号
○二二二	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二三	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二四	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二五	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二六	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二七	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二八	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二九	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二三〇	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号

○二一六	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二一七	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二一九	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二〇	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二一	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二二	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二三	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二四	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二五	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二六	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二七	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二八	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二二九	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号
○二三〇	赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井 赤宮赤井	赤宮 赤井 赤一〇九九号

N-0034

0297

1111	東洋大臣宛 郵部大臣宛 英蘭支上日米交渉トノ 関係	華府電 第ハ〇九号 一〇四七号 及ハ八〇号
1112	郵部大臣宛 東洋大臣宛 日本側之案ニ對スルハ 中野村未届合致後報告	華府電 第一一五九号
1113	郵部大臣宛 東洋大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛	華府電 第一一六号
1114	東洋大臣宛 郵部大臣宛 日米交渉ニ對スルハ 延長命令	華府電 第ハ八号

外務省

Whitdale
2002

1118	郵部大臣宛 東洋大臣宛 暫定ノ了解成立得テ 進言ス	華府電 第一一三四号
1119	郵部大臣宛 東洋大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛	華府電 第一一三六号 第一一三七号 第一一三八号
1120	同上 佛印北部ニ移駐ヲ 承認ス	華府電 第ハ〇一七号
1121	東洋大臣宛 郵部大臣宛 暫定ノ了解ニ對スルハ 提言ヲ訓令ス	華府電 第七九八号 第七九九号 第八〇〇号
1122	郵部大臣宛 東洋大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛 東洋大臣宛 郵部大臣宛	華府電 第一一四七号

外務省

N-0034

0299

展覧者名目表

一一二七	野村大佐宛 東野大佐宛	華府手配
一一二七	米例新撰案一同之意見	一一九〇号
一一二七	上申	一一九一号
一一二七	野村大佐宛 東野大佐宛	華府手配
一一二七	米例新撰案の意見	一一八九号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九二号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二七	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号
一一二八	野村大佐宛 米例新撰案全文	一一九四号

外務省

一一三三	野村大佐宛 東野大佐宛	華府手配
一一三四	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三四	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三四	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号
一一三六	野村大佐宛 東野大佐宛	一一八二号

外務省

N-0034



一四	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
一五	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
一六	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
一七	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
一八	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
一九	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二〇	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二一	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二二	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二三	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二四	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二五	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二六	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二七	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二八	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
二九	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一
三〇	郵船大佐宛 東京大臣宛 佛印塔無事事情 說明批別令	華府宛 八月一

一八	東京大臣 在東京レイト吳口 下及ト含法 要事	覚書
二八	米口及英口ニ對レ宣狀 布告ニ向ス 秘密防衛令 漢中ニ要件 (松本信四郎長 録)	覚書
三八	開戦ノ旨ニ示す	
	同帝白紙看聲明	
	日米交渉経過	
	帝口政府ノ對米通牒	

外務省

N-0034

0302

145
第 一 六 七

電 信 寫 號 符 機 昭和十六年十一月二十七日午後 時 分 發 主

東 郷 外 務 大 臣 宛 華 府 野 村 大 使 發

第 一 二 〇 四 號 (極 秘 館 長 符 號)

貴 電 第 八 四 二 號 二 開

米 側 三 於 予 八 豫 テ ヲ リ ノ 主 張 並 ニ 我 方 ノ 要 求 ニ 依 リ 關 係 國 ヲ ル 蘭 ト モ 協 議 中 ナ ル 折 柄
本 月 二 十 四 日 「 ホ ワ イ ト 」 ハ ウ ス 發 表 ノ 如 ク 米 國 ハ 在 英 國 ノ 蘭 政 府 ト 協 定 ノ 上 蘭 領 ヲ ア
保 護 進 駐 ヲ 斷 行 シ ン ル カ 右 發 表 ニ 明 記 セ ル 如 ク 同 進 駐 ハ 米 國 國 防 資 源 ト シ テ 必 要
ナ ル コ ー ア ル ミ ニ ヲ 凶 確 保 ヲ 主 眼 ト シ 而 モ 平 常 時 ナ ラ ハ 蘭 國 政 府 カ 蘭 印 ノ 兵 力 ヲ 派 遣 ス
ハ キ 答 ナ ル モ 西 南 太 平 洋 ニ 於 ケ ル 現 在 ノ 情 勢 ノ 下 ニ 之 ヲ 行 フ ヲ 得 サ ル ヲ 以 テ 米 國 陸
軍 ヲ 以 テ 同 地 ノ コ ー ア ル ミ ニ ヲ 凶 鑛 山 ヲ 保 護 ス ル モ ニ シ テ 同 時 二 蘭 政 府 ノ 招 請 ニ 依 リ
伯 刺 西 爾 モ 之 ニ 參 加 セ ル 第 三 明 カ ニ 之 處 ニ 鑑 ミ 又 曩 二 蘭 國 外 相 カ 蘭 印 訪 問 ノ 途 次
當 地 ニ 立 寄 リ 米 國 政 府 當 局 ト 協 議 セ ル 後 米 ノ 對 蘭 印 軍 需 品 ノ 供 給 及 技 師 ノ 米
蘭 印 間 ノ 往 來 等 ノ 事 實 並 二 蘭 印 ノ 歷 史 ニ モ 徵 シ 日 米 文 涉 ノ 決 裂 ノ 結 果 三 伴 フ

S 14.1.4.0-1 02

N-0034

0303

情勢如何ニ依リテ、英米カ前記米伯ノ蘭領「ギアナ」進駐ノ如ク蘭印ニ於ケル護謨、錫等
ノ國所資源確保ヲ名トシテ之カ保護進駐ノ手段ニ出ツルコトアリ得「キ」ヲ考慮ニ入レ置
クノ事アル次第ニテ往電第一八〇號ニ此ノ點ニ言及セルモ右ノ趣旨ニ他ナラス（了）

S. 14.1.40-1 03

N-0034

0304

145
第145号

電 信 寫 號 番 總 四 三 九 〇 五 號 符 音 昭 和 十 六 年 十 一 月 二 十 日 前 〇 時 三 十 分 發 主

在米野村大使宛 東郷大臣發

第八〇〇號(大至急 館長符號)

往電第七九九號ニ關シ

往電第七八〇號ノ一、二開シ南東亞細亞及南太平洋トセルハ蘭領印度泰ヲ含ムモ支那ハ

含マズ

三ノ第二項ニ關シ所要量ハ今次取極調印前ニ兩國政府協議決定方希望ス

四ハ米國ノ援蔣行為停止ヲモ意味スルモノト御含置アリ度シ

五ニ關シ第二項往電第八〇一號ハ協定急速締結ノ為敢テ提議セントスル極メテ重要ナル讓歩ナリ

六ニ關シ我方ニ於テ獨リ支那ノミニ通商無差別ノ原則カ行ハルコトヲ容認シ得サルハ往電

第七四號ノ通ナリ

七ノ第二項末段米國ノ歐洲戰參入ノ場合ノ我方態度ヲ「自主的ニ行フコト」ノ説明トシテ右場

合攻撃アリトナリヤ至ヤニ關シテハ帝國カ三國條約ニ於ケル他締約國ノ解釋ニ拘束セラレルコト

S 14.1.4.0-1

04

N-0034

0305

ナク解釋シ得ルモノナルコト及三國條約中ニハ何等ノ秘密協定モ存在シ居ラサルコトヲ明
ニセシ差ナシ(但シ本項説明ハ協定成立ノ見込付ク迄ハ之ヲ差控ヘラレタシ)

S 14.1.4.0-1 05

N-0034

0306

2
contemplation. I said that in the opinion of the American Government the occupation of Indo-China would be wholly inconsistent with the spirit of the agreement contemplated in the informal conversations above-mentioned and entirely divergent from the type of policy which the Japanese Government would pursue if it were adopting the course laid out in those conversations. I therefore felt obliged to make inquiry with regard to the actual facts. We could, of course, fully understand that the adoption by the new Cabinet in Japan of policies of the nature discussed in Washington would require some time. I said that this Government was prepared to be most patient and considerate if the Japanese Government wished to conclude the agreement under discussion but required time because of the state of public opinion in Japan. If, however, the Japanese Government should embark on any such policy as that of occupying Indo-China, the United States, along with other nations interested in the Pacific who love peace, would have to reconsider their respective positions.

Mr. Wakasugi said positively that no information was possessed by the Japanese Embassy which would indicate that Japan intended to occupy Indo-China or to take any action not consistent with the policies contemplated in the Washington conversations. It was his opinion that the new Minister for

Foreign

S 14.1.4.0-1

07

3
Foreign Affairs could not have had time to determine questions of policy. Mr. Wakasugi then asked whether in the event of occupation by Japan of Indo-China, such action would prejudice the successful conclusion of the conversations. I replied that it did not seem logical that one party be engaged in discussions postulated on the pursuit by both parties of a policy of peace, while the other party be implementing policies hopelessly inconsistent with those of peace.

S 14.1.4.0-1

06

N-0034

0307

STRICTLY CONFIDENTIAL

Paraphrase of a Telegram Received by the American
Ambassador at Tokyo from the Acting Secretary of State.

The Japanese Ambassador being absent from Washington
on July 21, Mr. Wakasugi called at my request.

Referring to recent informal conversations between
the Japanese Ambassador and the Secretary of State, I
said that an agreement which was ultimately possible
between the two Governments would have to be based upon
the maintenance of peace in the Pacific, renunciation by
the Governments principally interested in the Pacific of
conquest or force as instruments of national policy, and
respect for the principles of equality of opportunity and
equality of treatment.

The Japanese Ambassador had recently alluded to Japan's
fear of encirclement. I said that, in the light of explana-
tions of American policy which the Secretary had given the
Japanese Ambassador on so many occasions, I felt confident
that the Japanese Government could not believe that the
American Government had the remotest intention of pursuing
toward Japan a policy of encirclement.

I then said to Mr. Wakasugi that a number of reports
from many different sources obliged me to assume that the
early occupation of French Indo-China by Japan was under
contemplation.

S 14.1.4.0-1

08

N-0034

0308

(昭和一六四)

日支事變勃發以後ノ日米關係概観

日支事變以來ノ米國ノ對日動向ハ大体之ヲ三期ニ分ケテ考フルコト
カ出來ル、第一期ハ事變開始以來一九三九年九月第二次歐洲大戰開
始迄、第二期ハ第二次歐洲開戦以來一九四〇年九月日獨伊三國同盟
締結迄、第三期ハ右三國同盟締結以來現在ニ至ル。
右三期間ヲ通シ米國輿論ノ動向ハ大体ニ於テ反日的、接防的ナルコ
トハ勿論デアルカ、其ノ程度及熱意ノ點ニ於テハ右三期ノ間ニ若干
ノ差異アルヲ以テ説明及了解ノ便宜上茲ニ右大体ノ區分ニ應シテ、
米國朝野ノ對日態度及動向ニ就テ説明スヘシ

第一期 自一九三九年七月至一九三九年九月上旬

一九三七年今次日支事變勃發以來米國朝野力其ノ傳統的對支同情、
米國商品ノ將來ノ市場トシテノ過大評價ヲ前提トシ日本ノ支那市場

外務省

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 09

獨占ニ對スル杞憂及反對、滿洲事變以來日本ノ東亞新秩序建設ノ爲
ノ實力的行動ニ對スル九國條約其他ノ條約論ヲ擧擧シ其ノ實ハ日本
ノ東亞ニ於ケル勢力強化ニ對スル嫉視竝ニ不安等ヨリ日本ノ對支行
動ヲ攻撃セリ、更ニ又無防備地帯燦撃、非戰闘員ノ迫害、在支第三
國權益ニ對スル侵害等ヲ理由トシテ、國務省其他政府方面ニ於テ對
日輿論惡化ニ指導的役割ヲ演シタルカ更ニ輿論ノ惡化ノ原因トナリ
タルハ當時ノ米國共産黨ノ活動ナリ、米國共産黨ハ一九三五年第十
回「コミンテルン」世界大會ノ結果他ノ諸國ニ於ケル共産黨同様所
謂人民戦線の戦術ヲ採用スルニ至リタルカ「ルーズベルト」大統領
ノ社會主義的政策ト相違ツテ米國共産黨ヲ指導勢力トスル所謂「デ
モクワンシー」擁護「フアシズム」反對ノ運動ハ一九三七、八及九年
ノ頃ニ於テハ米國ノ社會組織ノ隅々迄浸透シテ居タコトハ洵ニ想像
以上ヲアツタ。然ルニ帝國ノ對支行動ハ支那ニ於ケル共産勢力撲滅
ヲ根本理由ノ一トシテ居ル關係上「ソ」聯邦カ日本ノ對支活動ニ反

外務省

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 10

N-0034

0309

對タリシコトハ言フ迄モナイ次第デアルガ、右「ソ」聯ノ態度ハ聽テ「コミンテルン」ヲ通シ米國共產黨ニ對シ米國內ニ於テ日本ノ對支行動反對ノ輿論醸成、延イテハ軍需原料ノ對日輸出制限乃至禁止生絲其ノ他日本ノ弗資金獲得ノ爲ノ對米輸出品ノ不買等ノ反日運動竝ニ他面蔣介石政權ニ對スル軍需品ノ供給、資金貸與、難民救濟基金募集等ノ各般ノ而モ一貫シテ援蔣ニ依ル日本國力ノ消耗、日本ノ對支行動完遂防害ヲ目的トスル各種ノ運動ヲ組織スヘキ旨訓令セル次第デアルカ、恰モ前述ノ如ク當時米國ニ於テハ米國共產黨ハ「フアシズム」反對、「デモクラシー」擁護ノ人民戰線運動ノ中堅的指導勢力トシテ輿論ヲ支配シ得ル地位ニアリタル爲、斯ル「ソ」聯ノ反日援蔣的指令ハ米國共產黨ヲ通シ殆ト信シ得ヘカラサル程度ニ於テ米國輿論ヲ我方ニ不利ニ動かスコトトナツタノデアル。

日本標準規格B5 S 14.1.4.0-1 11

外務省

而シテ當時ノ米國共產黨カ人民戰線運動ニ指導的役割ヲ演シ得タル事情ヲ檢スル米國輿論構成機關即チ新聞、雜誌、「ラヂオ」活動寫眞等ハ單ニ其ノ資本系統ニ於テノミナラス、之等機關ヲ運用スル幹部ハ勿論下級職員ニ至ル迄猶太勢力カ極メテ濃厚タルコトナリ、彼等ハ猶太民族固有ノ超國家的、個人主義的の人生觀、社會觀ヨリ本來「デモクラシー」ノ闘士、全体主義タル「フアシズム」反對ノ立場ニ在ル處更ニ猶太民族迫害ヲ重要政綱ノ一トシテ「ヒットラー」カ全体主義タル「ナチズム」政權ヲ樹立セル關係モアリ、共產黨カ「コミンテルン」ノ指令ニ基キ「フアシズム」、「ナチズム」反對ノ人民戰線運動ヲ開始スルヤ猶太人ニ支配セララル米國ノ輿論構成機關ハ右運動ニ對シ全面的同情支持ヲ與ワルコトトナレリ、從テ前述ノ如ク日本ノ對支行動カ蘇聯邦ノ反對ヲ受クルコトトナリ從テ「コミンテルン」ヲ通シ米國共產黨ノ反對ヲ受クルコトトナリタル結果日本ノ對支行動ハ「デモクラシー」國支那ニ對スル全体主義國家日本

日本標準規格B5 S 14.1.4.0-1 12

外務省

N-0034

0310

ノ侵略行爲ナリトノ極メテ簡單且不正確ナル刻印ヲ押サレ米國輿論
構成機關ヲ敵トセルコトトナリ斯クテ米國對日輿論ハ意外ニ惡化ス
ルコトトナレリ、勿論共產黨ノ外「ミッシェナリー」、教會等カ人
道の理由ヨリ日本ノ對支行動攻撃カ輿論惡化ニ寄與スルトコロ大ナ
ルモノアリタルハ事實ナルモ當時ハY、M、C、A、Y、W、C、
A等ノ宗教團體内ニモ共產主義的人民戰線分子カ潛入シ内部ヨリ密
カニ日本ノ對支行動攻撃ノ原動力トシテ活動セリ、斯クテ當時ハ表
面眞面目ナル團體ノ體裁ヲ裝ヒ乍ラ内面的ニハ共產分子ニ支配左右
セラレ居タルモノ極メテ多數アリタルカ其ノ最モ著シイ例トシテハ
一九三三年組織セラレ一九三七年ヨリ三九年獨「ソ」不可停條約締
結ニ至ルニ、三年間米國ノ獨、伊、日等所謂非「デモクラシー」國
家ニ對スル輿論糾合ノ爲ノ共產黨外廓團體「アメリカン・リーグ、
フ・ア・ピース、アンド・デモクラシー」ヲ舉ケルコトカ出來ル、
同團體ハ各種宗教團體、平和團體、勞働團體、農民組合、婦人團體、

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1

學生團體等ヲ構成團體トシテ居リ關係諸團體所屬人員ヲ網羅スル時
ハ僱ニ五百萬人ヲ突破スト高言シ又一般ニモ信シラレテ居ツタノテ
アルカ、其ノ内部機構ヲ巨細ニ點檢スレハ、一、三十名ノ共產主義
者又ハ共產黨ノ「シンパ」カ實權ヲ握リ、同團體ノ活動ヲ内部ヨリ
支配シ之カ意見決定ヲ爲シ居ルモ、右事實ハ一般ノ人ハ之ヲ知ラス、
同團體ノ幹部乃至役員トシテ名ヲ連ヌル知名ノ穩健分子ノ名ニ眩惑
セラレ、本團體ノ意思表示ニ對シテ不當ノ價值ヲ置クコトトナレリ。
斯テ一九三八年本團體カ日本ノ對支行動ヲ誹謗シ軍需品ノ對日道義
的禁輸ヲ決議シ、大統領ヲ始メ政府議會方面ニ之ヲ陳情セル事實ア
リタルカ右ニ關シ米國ノ新聞、「ラデオ」等ハ五百萬ノ米國市民ヲ
代表スル本團體ノ眞劍ナル對日意思表示トシテ取扱ヒタルコトアリ、
其ノ實ハ同團體幹部中ニアリタル儘カ數名ノ親支的共產黨員ノ策謀
ニ過キサリシ次第ナリシモ我方ニ對スル有害ナル影響ニ於テハ斯ル
内部の事情如何ハ何等差異ヲ與フルモノニアラス

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1

斯テ國務省内九ヶ國條約至上論者、海軍部内ニ於ケル強硬論者、左支「スタンダード」石油會社、在支米人宣教師、「サッサン」財閥及「ソ」聯ノ外廊機關トシテノ米國共產黨ノ公然乃至陰然タル策動ニ依リ米國ノ對日輿論ハ悪化ノ一路ヲ辿リ日本誹謗、對日不買運動道義的禁輸運動等盛ニ唱道セラレタルモ、他方米國內ニ於テハ支那ノ現實ヲ知り比較的公正ナル對日認識ヲ有スルト同時ニ日米貿易ノ重要性ニ鑑ミ此種運動ニ對シ最惠國條款ノ違反トナルニアラスヤ等ヲ理由トシテ反對スルモノモアリタル爲政府ハ遂ニ一九三九年七月此種措置實行上法の障礙トナル日米間通商條約ヲ一方的ニ廢棄スルニ至レリ。而シテ之カ廢棄ノ理由ハ之ニ依リ對日經濟壓迫ノ措置ヲ執ル自由ヲ回復スルト共ニ他方斯ル態勢ヲ整備スルコトニ依リ日本ヲ牽制シ、出來得レハ日本ノ自制ニ依リ支那ニ於ケル軍事行動ノ終結乃至ハ在支米國權益壓迫措置ノ終止ヲ企圖シ、他方日本カ既定方針ヲ強行シ、從テ日米衝突ニ至ルカ如キ場合ヲモ想定シ其ノ間出來

外務省

得ル限り軍需資材ノ對日供給ヲ制限スルコトニ依リ日本ノ軍需力及一般國力ノ増大ヲ可及的ニ牽制セントスルニアリタリト認メラル

外務省

N-0034

0312

第二期 自一九三九年九月三日 至一九四〇年九月二十六日

前述ノ如ク米國政府ハ輿論ノ要求モアリ又輿論ヲ口實トシテ極東ニ於ケル日本牽制ノタメ對日經濟壓迫措置ヲ講スル肚ヲ決定シ、之カ前提トシテ七月二十五日兩國間ノ通商條約ヲ廢棄セルカ、其ノ後幾何モナクシテ九月三日第二次歐洲大戰勃發セリ、米國政府ニシテ斯クモ速ニ歐洲戰爭カ勃發スルコトヲ七月當時豫知シ得タランニハ果シテ日米通商條約廢棄ノ措置ニ出テタルヤ疑問ナリトノ説ヲナス者アル處、斯ル説ニハ若干ノ根據アルヘキモ、現實ノ問題トシテハ英獨戰爭開始後ニ於テモ米國政府ハ其ノ對日非妥協的強硬態度變更ノ兆候ヲ示サザリキ。蓋シ獨逸一國ニ對シ英佛及其他ノ小國カ團結シ居ルヲ以テ、英佛側カ假令準備立進レタリトハ言ヒ、急速ニ敗亡スルカ如キコトハ絕對豫想シ得サルトコロナルヲ以テ極東ニ於ケル英米佛ノ權益ヲ擁護スルト共ニ英國ノ士氣ヲ鼓舞スル意味ニ於テモ對日

外務省

日本標準規格 B5) S 14.1.4.0-1 17

強硬態度ヲ維持スルコト得策ナリト考ヘタルニ依ルモノト認メラル尙獨逸ハ今次開戦ニ先ナー一九三九年八月二十三日「ソ」聯邦トノ間ニ不可侵條約ヲ締結シ背後ノ憂ナカラシムルト共ニ右政治的調整ヲ前提トシテ食用其他軍需原料ノ供給ヲ「ソ」聯邦ヨリ仰キ、長期戰ノ構ヘテ整ヘタルハ御承知ノ通りナル處、右獨「ソ」不可侵協定ハ米國共產黨及之ヲ指導勢力トスル人民戰線運動ニ大ナル打撃ヲ與フル結果トナリタリ。即チ米國共產黨及外廓團體内部ノ猶太人ハ「ソ」聯邦カ「ヒットラー」獨逸ト握手セルコトヲ憤慨シ共產黨乃至其ノ外廓團體ヲ脱退スルモノ續出セルノミナラス、人民戰線運動自体モ一夜ニシテ其ノ勢力ヲ失フニ至レリ。右事實ハ先ニ述ヘタル米國輿論構成機關ニ於ケル猶太勢力ニ原由スルモノニシテ、「ソ」聯邦カ猶太人ノ敵「ヒットラー」以權ト妥協セル一舉ニ依リ一九三三年「ルイスベルト」ノ初回大統領就任以來數年ニ亘リ米國社會各方面ニ差シモ廣汎強大ナル根ヲ張リタリト認メラレタル共產黨ノ勢力ハ一朝

外務省

日本標準規格 B5) S 14.1.4.0-1 18

N-0034

0313

ニシテ彼落スルニ至レルカ、要スルニ如何ナル國家又ハ團體ニセヨ、猶太ヲ敵トスル場合米國內ニ於テハ輿論構成機關ヲ敵トスル適例ナリ

他方米國共產黨及其ノ亞流ハ第二次世界大戰ヲ以テ從前彼等カ人民戰線運動ニ於テ主張セルカ如キ「フアシズム」、「ナチズム」勢力ニ對スル「デモクラシー」擁護ノ戰爭タル説明ヲ拋棄シ、右ハ英佛獨ニ於ケル帝國主義者ノ共喰的闘争ニ過キス從テ米國無産階級トシテハ何レノ側ニモ加擔スヘカラストノ態度ヲ執ルニ至レリ。但シ日支事變ニ關シテハ支那ノ民族解放運動援助ノ見解ニテ引續キ反日援蔣ノ態度ヲ執レリ右ハ一見矛盾セルカ如ク認メラルル處何レモ「ア」聯邦ノ對外方針ヲ反映セルモノニ過ギザルコトヲ知ルトキ、右矛盾ハ了解シ得ラルル次第ナリ。

然ルニ一九四〇年春以來諸威、丁株、和蘭、白耳義ニ續キ佛蘭西カ崩壞シ、延イテハ獨逸ノ對英上陸作戰目焦ノ間ニ迫レリトノ印象米

國朝野ヲ支配スルニ及ヒ操觚界ノ有力者等ニシテ米國カ安ンシテ英國援助ニ當リ得ル爲ニハ太平洋ニ於ケル後顧ノ憂ヲナカラシムル要アリトテ對日宥和政策ヲ主張スルモノ現ハレ相當共鳴者ヲ見ルニ至リ右見解ハ政府及議會ノ一部ニ於テモ相當眞面目ニ研究セラルルニ至リタルカ、未タ大勢ヲ支配スルニ至ラズ、特ニ「ルーズベルト」及「ハル」ハ常ニ日本ノ眞ノ意圖ヲ解シ得スト稱シ且事實斯ク信シ居タルカ如キト共ニ假令日米融和ノ機會到來スルコトアリトスルモ其ノ前提タル日米折衝ニ於テ米國ノ立場ヲ有利ナラシムル目的ヲ以テ一方ニ於テ重要軍需材料等ノ對日輸出制限ヲ益々擴大シ或ハ對日排勝乃至「ブラッゾ」ヲ改メザリキ、斯ル措置乃至遠慮ハ又日本側ヲ刺戟シ英米トノ妥協融解ニヨリ事變ノ完遂東亞新秩序建設ノ困難ナルコトヲ益々痛感セシムルニ至リ斯クテ我方ハ歐洲及「アフリカ」ニ於テ同シク新秩序ヲ建設ニ邁進シツツアル獨伊トノ間ニ軍事同盟ヲ締結スルニ至リタル次第ナリ。

N-0034

0314

而シテ三國同盟ニ依リ獨伊ト進命ヲ共ニスルニ至リタル帝國ニ對シ
米國輿論（前述ノ米國輿論構成機關ノ猶太性參照）ハ從前ニ比シ更
ニ惡化シ獨進ニ對スル程度ニハアラスト難モ、日本ヲ準敵國視スル
ニ至リ大體ニ於テ日本トノ衝突不可避ノ事態到來ヲ豫想シ一方ニ於
テハ日本側ヲ諷意セシムル爲、他方ニ於テハ右ノ不成功ノ場合日本
ノ軍備乃至一般國力強化ヲ出來得ル限リ阻止スル爲、新ニ各種ノ重
要軍需材料ノ輸出許可制（事實上ハ輸出禁止）ヲドシテ實施スル
ニ至レリ。

日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 21

外務省

第三期 自一九四〇年九月二十七日至現在

多數歐洲諸國ノ急速ナル崩壊ニ引續キ日獨伊三國同盟ノ締結ハ米國
朝野ヲ著シク失望落膽セシメタルコト勿論ナルカ更ニ政府竝ニ英國
援助論者ハ英國ノ危機延イテハ米國乃至西半球諸國自体ノ國防カ危
險ニ類スルヲ眞剣ニ憂慮セサルヲ得サル事態ニ立至タリ。斯クテ大
統領ハ英國（乃至蔣政權）援助ノ爲ニハ戰爭一歩手前ノ如何ナル措
置ヲモ講スヘキコトヲ主張シ、之カ爲飛行機及艦艇其ノ他ノ軍需品
ノ急速ナル増産ノ要ヲ力説シ米ノ國力ヲ之ニ傾倒スヘキコトヲ以テ
大統領選舉ノ「スローカン」トシテ米國歷史上最初ノ第三期立候補
ヲナシ且見事當選スルニ至レリ。右三選ノ榮冠ヲ得タル「ルーズベ
ルト」ハ其ノ餘勢ヲ驅ツテ一面英國其ノ他被侵略國家ノ援助、樞軸
國家誹謗、軍備擴張ニ狂奔スルニ至レルカ他面本邦ニ對シテハ益々
經濟壓迫措置ヲ強化スルニ至レリ。

日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 22

外務省

N-0034

0315

又蒋介石政權ニ對シテハ三國同盟締結ノ豫報及帝國ノ佛印進駐ニ對スル意思表示トシテ九月二十五日二千五百万弗ノ借款ヲ與ヘ、更ニ十一月三十日日本ノ南京新政府承認ト同時ニ五千弗宛三口ノ借款ヲ附與シ、對日敵意ヲ露骨ニ表明セリ。

延イテ十二月二十九日ノ爐邊閑談及一月六日ノ議會教書ニ於テ大統領ハ樞軸國ト依ル被侵略國家援助ヲ強調シ之カ爲老犬ナル國防豫算案(總額百七十五億ノ新年度豫算中六割三分約百八億弗ハ國防費ナリ)及武器貸與法案ヲ議會ニ提出セリ。而シテ一月十五日武器貸與法案審議ノ下院外交委員會ニ於テ「ハル」長官ハ今日ノ國際危局ハ日本ノ滿洲武力占領ニ端ヲ發ストノ對日誹謗的言辭ヲ弄シ、日米關係打開ノ爲ノ米ノ努力ハ現在ノ處徒勞ニ歸セリトテ、對日示威的口吻ヲ洩セリ。

右武器貸與法案ハ要スルニ米國ヲシテ英國、希臘、蔣政權等所謂樞軸國ノ犧牲者ニ對スル一大兵器廠タラシメントスルニアル處、他方

外務省

(日本標準規格B5)

S 14.1.4.0-1

23

國內的ニハ大統領ノ獨裁權ヲ強化スル爲米國議會内外ニ相當ノ反對アリタルカ結局「ルースベルト」政府原案ニ大シテ重要ナル修正ナク三月十一日議會ヲ通過シ即日大統領ノ署名ヲ得テ公布實施ノ運ヒトナレリ。

武器貸與法案實施ノ結果(1)大統領ハ米國ノ國防ニ重大關係アリト認定スル國ノ國防ノ爲ニ必要ナル軍需品ヲ米國內官營軍需工場ニ於テ生産シ、又ハ民間ヨリ買上ケ之ヲ賣却、貸與、其他ノ方法ニテ供給シ得ルコト(2)大統領ハ右政府ヲシテ米國內ニ於テ軍需品ノ試驗、修繕其他必要ナル裝備ヲ爲スコトニ付許可ヲ與ヘ得ルコト(從ツテ英國ノ軍艦カ米國港灣ニ碇泊修理スルコトモ可能トナル)(3)大統領ハ其ノ自由裁量ニ依リ現行法ニ基ク輸出許可又ハ禁止品目ニ付其ノ欲スル國ノ爲例外ヲ設ケ得ルコト(4)前記各項ノ軍需品ノ貸與其ノ他ノ處分ノ代償トシテハ大統領ニ於テ「直接間接米國ニトリ有利ナリ」ト認ムル如何ナルモノニ依リテモ決濟シ得ルコト

外務省

(日本標準規格B5)

S 14.1.4.0-1

24

N-0034

0316

國立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

http://www.jacar.go.jp

等大統領トシテハ反樞軸國家援助ノ爲ニ軍需品其他戰爭遂行上必要ナル一切ノ物資ノ供給ニ付絶大ナル權限ヲ與ヘラルルコトナリタル次第ナルカ、更ニ本法案審議中反對派ノ提出シタル米軍艦ニ依ル商船護送禁止、米軍艦ノ交戰區域立入禁止等ノ條項カ何レモ否決セラレタル結果大統領ハ大統領又ハ陸海軍統帥者トシテ有スル其ノ本來ノ權限ニ基キ、此等ノ措置ヲ爲シ得ルモノト解セラレ從テ英國援助ノ必要ニ應ジテハ敢テ之ヲ爲スモノト解セラレ居レリ、從テ米國軍艦乃至商船カ大西洋上ニ於テ獨逸潛水艦ニ擊沈セララルル機會モ瀕發スベク斯クテ米獨間衝突ノ危險性ハ増大スルコトトナルヘシ。

外務省

日本標準規格 B5

S 14.1.4.0-1

25

尙本法ニ依リ大統領ハ十三億弗ヲ限リ改メテ議會ノ協贊ヲ要セスシテ米國陸海軍現有ノ武器軍需品又ハ既存契約ニ依ル物資ヲ英國等ニ對シ供給スル權能ヲ與ヘラレ居ル處同法實施ノ翌日タル三月十二日、莫速若干ノ武器軍需資材ヲ英國及希ニ供給方取計ヘタルカ更ニ大規模ナル英國援助ヲ可能ナラシムル爲取敢ヘス七十億弗ノ豫算ヲ議會ニ提出セリ、武器貸與法案ノ通過ニ依リ反樞軸國家援助ニ對スル米國議會從テ輿論ノ支持ヲ得タル「ルーズベルト」大統領ハ三月十五日夜白聖館出入新聞記者聯盟主催ノ大統領招待晚餐會席上ニ於テ今後ノ米國最高目標ハ世界ノ一勢力トシテ「ナチス」ヲ撲滅スルコトニシテ、其ノ目的ノ爲ニハ全米ノ物的資源ヲ傾ケ盡スモ敢テ辭セストノ意味ヲ叫ビ之カ爲國民各自ノ偉大ナル犠牲ヲ要求シ、未曾有ノ生産増加ニ依リ「デモクラシー」ノ全面的勝利カ達成セララル迄反樞軸國家ニ對スル最大限ノ援助ヲ持續スヘキコトヲ主張セルカ其ノ論調從前ノ

外務省

日本標準規格 B5

S 14.1.4.0-1

26

N-0034

0317

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

http://www.jacar.go.jp

反樞軸演説ニモ増シテ激越ニシテ米國ノ參戰氣運更ニ一步前進セル
コトヲ感得スル次第ナルカ、「ルーズベルト」ハ東ニ之ニ依リ米國
内ニ於ケル獨裁國トノ宥和論乃至ハ戰爭反對論ヲ沈黙セシメ一億三
千萬ノ米國市民ヲシテ唯々諸々トシテ自己ノ獨裁的指揮ノ下ニ「ナ
チ」獨逸及其ノ與國トノ一大決戰ニ投セシメントスル意圖漸次明カ
トナレリト稱セラル

而シテ武器貸與法ノ議會通過三月十五日白聖館出入新聞記招待晚餐
會ニ於ケル大統領ノ演説等ニ依リ米國內ニ於ケル英國援助ニ關スル
異論ノ大部分ハ遁息シ反樞軸國援助ノ氣運米國輿論ヲ風靡非スル趨
勢ニ在リ、斯クテ前出武器貸與法實施關係豫算七十億弗ノ審議ノ如
キモ僅々十二日間ニテ三月二十四日議會ヲ通過シ然モ下院ハ三三六
對五五、上院ハ六七對九ノ壓倒的多數決ニテ且無修正ニテ通過ヲ見
タルカ、曩ニ武器貸與法自体ニ對シテハ反對ヲ唱ヘタル共和黨議員
竝ニ孤立主義者ノ如キモ大部分贊成投票ヲ爲セリ、

外務省

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 27

斯クテ米國ノ現状ハ「ローズヴェルト」大統領ヲ首魁トシ國ヲ擧ケ
テ、漸次從來ノ「戰爭一步手前」ヨリ「戰爭モ敢ヘテ辭セス」ノ強
硬態度ヲ以テ反樞軸國家ノ援助及自國々防強化ノタメ軍備擴張ニ狂奔
シツツアリ、現ニ一九四一年度ノ追加豫算、四二年ノ豫算及七〇億
弗ノ武器貸與法實施豫算ヲ通算スルトキハ實ニ莫大ナル金額ニ達ス
ヘシ(註二)然レ共現實ノ生産擴充及英國援助ノ進度ハ豫算額ノ無
制限ナル増加ニ拘ラス果シテ掛聲通り急速且大量ニ實現シ得ルヤ極
メテ疑問ナルカ其ノ主タル理由トシテハ(一)船腹ノ不足(二)勞働力ノ不
足及勞働爭議(三)工作機械及生産設備ノ不備等ヲ擧ゲ得ルノテアル、
特ニ英米兩國ニ於ケル船腹ノ缺乏ハ物資ノ對英輸送ニ重大ナル支障
ヲ來タス次第テアル(註三)、又熟練勞働力ノ缺乏ニ加ヘ勞働爭議
ノ瀕發(註四)ハ國防産業ノ圓滿ナル運行ニ重大ナル支障ヲ與フル
コト明ナリ、特ニC、I、O系勞働組合員中ニハ共產主義的乃至極
左分子多ク「ルーズベルト」大統領ノ所謂米國未曾有ノ危機ニ拘ハ

外務省

(日本標準規格B5) S 14.1.4.0-1 28

N-0034

0318

ラスA、P、L系労働組合ノ如ク反樞軸國家援助ノ爲ニ愛國の立場ヨリ根本ニ於テハ政府ニ協力スルカ如キ態度ヨリハ、寧ロ此ノ國際危機ヲ利用シ労働階級ノ階級の地位向上ヲ圖ラントシ居リ更ニ根底ニ於テハ共產黨ノ主張通り今次ノ歐洲戦争モ亦單ナル帝國主義國家間ノ鬭争ニ過キストシテ其ノ何レニ加擔スルコトヲモ拒否スル態度ヲトリツツアリ、故ニ單ニ労働條件改善ノ手段トシテノミナラス英國援助妨害、戦争ノ長期化、世界攪亂等ノ見地ヨリシテモ同盟罷業又ハ「サボタージ」等ノ手段ニ訴フル傾向漸次増大スヘシト考ヘラ
ルル次第ニシテ米當局トシテハ表面否定スルニ拘ラス本問題ノ發展性ニ付テハ極メテ重要視シツツアリ、其ノ結果三月十九日労働調停機關トシテ國防調停局（註五）ヲ創設セリ、又前述ノ如ク猶太的性格顯著ナル輿論構成機關ニ左右セラルル米國輿論ハ樞軸國反對、徹底的英國援助ノ一色トナリツツアリ、從テ英國援助ヲ遲滞セシムル運動ハ假令労働大衆ノ方面ヨリ來タル場合ニ於テ所謂輿論ノ敵ト捺

外務省

印セラルヘク斯クテ今後ハ調停局ノ活動ト相俟テ爭議ノ彈壓、労働組合運動ノ取締ハ嚴重ヲ極ムルコトトナルヘタ從テ爭議ノ脅威ハ一應減少スルコトトナルヘシ、尤モ他方ニ於テ機械設備ノ破壊其ノ他陰險惡質ノ事故瀕發ニ依リ生産工程ヲ阻害スルガ如キ事態ヲ招來スルモノト認メラル

外務省

N-0034



結語

最後ニ現段階ニ於ケル日米關係ヲ概觀スルニ米國ハ日本カ早晩三國同盟ノ說ニ依リ又ハ武力的南方進出ヲ敢行スル結果日米ノ實力的衝突ニ至ル場合ヲ考慮シ日本ノ軍備乃至國力ノ強化ヲ出來得ル丈ケ阻止スル趣旨ヨリ各般ノ重要物資ノ輸出制限、蔣介石援助ヲ加減シツツアリ、右ハ野村大使ノ赴任ニ依リテモ大ナル變化ナシ、序年ラ野村大使任命ニ對スル米國官民ノ「リアクション」ヲ臆ルニ大統領、海軍關係其ノ他有力米人間ニ多量ノ知己ヲ有スル野村大將ハ緊迫セル日米關係ニ於テ猶打關ノ餘地アリトセハ之カ衝ニ當ルヘキ日本代表トシテ最適任者ナリトシテ好感ヲ以テ迎ヘラレタルカ、他方右任命ヲ通シ日本ノ示シタル對米協調的態度ハ南方進出ノ時期到來迄一時米國ノ對日空氣ヲ緩和セントノ意圖ニ出ツルモノニシテ之ヲ以テ日米關係打開ニ對スル日本ノ誠意把握ト解シ從來ノ對日牽制措置ヲ緩和スルカ如キハ危險ナリト謂フカ大體ノ見解ナリト認メラル、斯

外務省

グテ前述ノ通り對日經濟壓迫及援蔣措置ヲ擴大強化スル外更ニ濠洲蘭印、「ニエト」シラント、「シンガポール」ヘノ海軍「オゾサー」及艦隊ノ派遣、同地方ニ於ケル軍事基地共同使用案、樞軸國聯聯邦離間工作、極東在留米人引揚ノ半強制的勸告、佛印泰蘭停交渉牽制目的ノ極東危機說捏造等々對日經濟壓迫、對日包圍陣形成ニ相當此ヲ据ヘタル工作ヲ爲シ來レル處武器貸與法ノ實施ニ依リ太平洋ニ於テ愈々對英援助ヲ積極化スルニ至ラハ之ト併行シテ極東ニ於テハ却テ英米共同ニテ政治、經濟、軍事ノ各方面ニ互リ對日協同動作ヲ強化シ日本カ隙ニ乘シテ武力的南進ヲ斷行スルヲ牽制スルニ努ムヘシ、尤モ日本ノ南方進出ヲ決定的タラシムルカ如キ程度ノ對日壓迫例ヘハ石油棉花ノ全面的輸出禁止、生糸ノ全面的輸入禁止、日本船舶ノ米國港灣利用禁止ノ如キ過激ナル措置ヲ執ルハ米々無グ或程度ノ對日壓迫ノ儘事態ノ推移ヲ注視シツツアルモノト認メラ

外務省

N-0034



又我方トシテ、武器貸與法實施ノ結果米獨問ノ衝突ヨリ三國間閉ノ關係上日米衝突ノ可能性ヲ眞面目ニ考慮スヘキ必要ニ迫ラルルニ至リタルカ、日米戦争ハ米國側ヨリスルトキハ速戰即決ヲ避ケ遠距離經濟封鎖、潛水艦及飛行機ニ依ル「ゲリラ」戰術ヲ以テ長期戰ニ出ツヘシトハ一般ノ意見一致セル點ナルニ鑑ミ我方ハ先ヅ長期戰ノ準備ト準備ヲセサルヘカラス、從テ其ノ間ニ於ケル蘇聯邦ノ傳播的外交方針ヲ常ニ念頭ニ入レ國運ヲ踏スル重大危局ニ關シ苟クモ國際情勢ノ判斷ニ誤算ナキヲ期セサルヘカラス、要之、日本ハ今ヤ日米衝突ノ可能性ニ付眞劍ニ考慮スル要アル處三國同盟締結ノ根本趣旨ニモ備ミ國民ヲシテ我方カ公正ナル立場ヨリ太平洋ヘノ戰爭波及防止ニ萬全ノ努力ヲ盡シツツアル事情ヲ平時ヨリ良ク了解セシメ、苟モ衝突開始後ニ至リ戰爭目的ヲ反問スルカ如キコトナキ機注意スルハ政府並ニ一般讀者ノ任務ナリ、斯クテ一方ニ於テハ冷靜ニ但シ大東亞共榮圈建設ニ對スル斷乎タル決意ヲ以テ有事ノ際ニ慮スヘキ準備ヲ

外務省

眞劍ニ進ムルト共ニ他方我方ノ準備並ニ決意固マラサルニ先チ徒ニ相手側ヲ刺戟シ對日經濟壓迫強化、對日包圍陣完成ヲ促進セシムルカ如キハ我方ニトリ不利ナルコトヲ國民一般ニ了解セシムルコト肝要ナリ

尙此ノ點ニ關連シ一言附言シタイト思ヒマスカ現在米國內ニハ第一世及第二世ヲ併セ約三十二萬ノ大和民族ノ血ヲ享ケタルモノカ在留シテ居ルカ是等ニ對シ米國ノ官民ハ通商條約失効後ニ於テモ大体其ノ從前ノ既得權益乃至營業權ヲ其繼承認シ且ツ必要ノ保護ヲ加ヘ彼等ノ社會生活ニ對シテハ日米兩國政府ノ政治的見解ノ相違ヲ理由トシテ之ヲ虐待スルカ如キコトハ現在迄殆ント無ツタ次第テアリマス然シ乍ラ今後更ニ日米關係ノ緊迫化ニ伴ヒ又殊ニ若シ本邦内又ハ日本ノ權力下ニ在ル極東ノ諸地域ニ於テ我方カ米國人ヲ虐待或ハ迫害スルカ如キコトアル場合ハ米國側ニ於テモ勢ノ赴ク處在米邦人ニ對シ報復的ニ同様ノ措置ヲ執ルコトナキヲ保シナイノテアリマスカ斯

外務省

N-0034

0321

ル場合御承知ノ通り極東在留米國人ハ元來少數ナル上ニ最近數度ニ
百ル國務省ノ引揚勸告ニ依リ更ニ減少シツツアリ從テ本邦在留米人
一人ヲ追察スルコトニ依ツテ在留邦人千人又ハ五千人ヲ同一危險ニ
願スコトトナル次第ニシテ算盤ノ上カラ見テモ極メテ不利ナルト共
ニ「スパイ」其ノ他ノ犯罪行爲ノ嫌疑ナキ限り引揚勸告ニ抑ハラ
日本ヲ好ムカ故ニ在留スルカ如キ外國人ニ對シテハ政府間ノ意見相
違ニ拘ハラズ大乗的見地ヨリ之ヲ武士道的精神ヲ以テ待遇スル大國
民ノ襟度ヲ好マシイト思ヒマス

日本標準規格B5

S 14.1.4.0-1

35

外務省

總番號二五四七〇 符號略 昭和十六年七月八日後五時 主管米
在米 野村大使 松岡外務大臣
首相、大統領ノ「メッセーヂ」交換ニ關スル件
第三四一號
六日在京米國大使近衛總理宛別電第三四二號「メッセーヂ」ヲ傳達
シ越セルニ對シ八日午後二時本大臣ヨリ別電第三四三號ノ「メッセ
ーヂ」ヲ「グルー」大使ヲ通シ轉達スル筈御參考迄

成

S 14.1.4.0-1

36

外務省

N-0034

0322

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

http://www.jacar.go.jp

531

總番號 二五四九五
符號略 昭和十六年七月八日午五時 主管米

在米 野村大使
松岡外務大臣

首相、大統領「メッセーヂ」交換ニ關スル件
第三四二號

外務省

S 14.1.4.0-1

37

成

N-0034

0323

the hope that it was also the desire of the Government of Japan to maintain and preserve peace in the area of the Pacific. The reports which are now reaching the American Government are so completely contrary to those statements and utterances that the Government of the United States finds it very difficult to believe in the truth of those reports.

Should Japan enter upon a course of military aggression and conquest it stands to reason that such action would render illusory the cherished hope of the American Government, which it understood was shared by the Japanese Government, that peace in the Pacific area, far from being further upset, might now indeed be strengthened and made more secure.

It is the earnest hope of the Government of the United

States that the reports of Japan's decision to enter upon hostilities against the Soviet Union are not based upon fact, and an assurance to that effect from His Excellency the Prime Minister of Japan would be deeply appreciated by the Government of the United States.

Tokyo, July 6, 1941.

Message sent by the Secretary of State at the specific request of the President for delivery to His Excellency the Prime Minister of Japan, dated July 4, 1941.

From a variety of sources reports are reaching the Government of the United States that it is the intention of the Japanese Government to enter upon hostilities against the Soviet Union.

As is well known to the Japanese Government, the maintenance and preservation of peace in the area of the Pacific has been the earnest desire of the American Government, which has contributed its greatest efforts to the achievement of that high purpose.

From statements made in recent months by the Japanese Ambassador in Washington, Admiral Nomura, to the Secretary of State, Mr. Hull, in the course of conversations between them, as well as from the utterances of responsible Japanese Officials, the Government of the United States has derived

S. 14.1.4.0 - 1 40

N-0034

0325

心宛

近衛者相メシ

S 14.1.4.0-1

41

N-0034

0326

Message in Reply sent by H. I. M.'s Foreign Minister' at
the request of the Prime Minister for delivery to the
President of the U. S. A., dated July 7th, Showa 16.

At a time like this all sorts of rumours are abundantly
bred not only in Japan but in all countries.

It is hardly necessary to state that the Prevention of
the European War from spreading to the regions of Greater
East Asia and the maintenance and preservation of peace in
the area of the Pacific have always been the sincere and
genuine desire of the Japanese Government which have
consistently contributed their earnest efforts toward
achieving that high purpose.

The Japanese Government wish to state, in reply to the
last paragraph of the Message, that they have not so far
considered the possibility of joining the hostilities against
the Soviet Union. The position of the Japanese Government
vis-à-vis the Soviet-Axis war was made clear in the Oral

S 14.1.4.0-1 43

- 2 -

statement of July 2nd, 1941 of H. I. M.'s Foreign Minister
to the Soviet Ambassador in Tokyo. One can do no better than
attach hereto a copy of this Oral statement for the
President's perusal in order to bring home the course of
policy Japan has been compelled to pursue in the present
circumstances. Of course, it is understood that the American
Government will treat it as strictly confidential.

Incidentally, the Japanese Government would like to
avail themselves of this opportunity for definitely
ascertaining whether it is really the intends of the
President of the American Government to intervene in the
European war as they are naturally and very deeply
concerned at the prospect, disturbed as they sincerely are,
by reports reaching them from a variety of sources.

S 14.1.4.0-1 42

N-0034

0327

(1)

秘書二一四三〇

昭和十四年七月十一日午前
十一日午後

有田外務大臣

堀内大使

第六三三号ノ一(秘知)

往復第六二八号會談ノ後本使ヨリ口頭長官ニ對シテ
 二訓令ナク自限リテ御尋ね次第ナルカ先般「ケル」大使
 離京ニ際シ有田大臣ヨリ日米關係ニ付一般的懇談アリ
 コトハ同大使ヨリ御聞及ヒ「若」ニ「夏」左ノ間ニ何等カノ感想
 フ承リ得ヘキヤト問ヒタルニ同長官ハ「珍州」ノ情勢ハ各口軍
 備ヲ競ヒテ對立關係ヲ生シ其ノ間ニ「強」曰ハ「小」口ニ對シテ強

S 14.1.4.0-1 44

一壓ヲ加ヘントシ何時最チ勅令スルヤニ測ラレサル有様ナカ
 口トシテハ終始一母貝平和ノ維持ヲ努メ殊ニ自今ハ年米貿
 易協定等ニ依リ經濟的不安ノ因ヲ除カント計リ且國際
 法ノ原則及條約尊重ニ唱道シ来レドト御承知ノ用リナリ
 故ニ米口トシテハ何レノ口ト雖も平和ヲ愛シ口際法ノ原則及
 條約ヲ遵守スル口民トハ協力ヲ辭セサルニテ日本政府ニ
 於テ歐洲ノ現狀ニ付憂ヲ共ニセラルルコトハ多トモ所ナルカ一方
 東亞ノ事態ニ顧ミ未タ日米間ニ充分協力ヲ實現シ得サル
 ヲ遺憾トストノ極ニ日ケ述ヘタリ其際同長官ハ貴大臣ク

外務省

S 14.1.4.0-1 45

N-0034

0328

外務省

付(續)

他各種ノ經濟的權益カ侵サレトハ默認シ得スト言ヘルニ

S 14.1.4.0-1 47

外務省

同ノ問題ニ付テハ直接利害ヲ有セシキ揚子江航行其ノ

至ルナキヤラ憂ト慮スル次第ナリ米口ハ天津問題ノ如キ日英

アリ右カ或ハ恒久化シ第ニ滿洲口ノ如キ專断ヲ見ルニ

ノ必要ヲ理由トシテ外口人ニ對シテ經濟的制限ヲ加ヘシ

益トノ關係ニ付テハ日本ハ支那占領區域ニ於テ軍事上

及同長官ハ第一東亞新秩序ノ建設ト米口權

先治第ナリトテ專員電第二〇一號ノ趣旨ヲ略説シタル

ヲ以テ本使ヨリ右會議ニ事案ヲハ三案ヲ中心トシテ行ハレ

大使會議ノ要莫ク充分記憶シ居ラセシヤノ印象ヲ得タル

S 14.1.4.0-1 46

N-0034

0329

總二四四六号

昭和十四年七月十一日 前夜 本有

有田 外務大臣

海内大使

第六三一号 (二) 秘

本便ヨリ現在ノ軍事行動ニ基キ種々ノ制限ハ已ムラ得サル
 所ナルニ將來支那ノ経済的復興事業遂行ノ爲ニ政米
 トノ協カヲ必要トスルニ勿論ニシテ門戸閉鎖ハ杜撰ナルコト
 ヲ述ヘタルニ同長官ハ支那ノ経済困窮ニ各口協カノ必要ナ
 ルコトハ自名ノ多年主張シ來ル所ナリト答ヘタリ 第二ノ帝口
 ノ海南島軍事占領及新南群島編入等ニ關係シテ

帝口ノ南進政策ニ對シ米人ノ危懼ノ甚ニ付テハ同長官
 ハ日本ハ既ニ支那ノ要地ノ大部ヲ占領シ居ル今日沿岸ノ
 諸島ヲモ占據スルコトハ軍事上ノ措置トシテ已ムラ得サルヘシ
 ト述ヘ前記米人側ノ危懼ヲ打消スルノ我方措置ニ付テハ
 同長官ニ於テ別段深ク考慮シ居ラサルヤノ印象ヲ得タリ
 第三ノ防共協定強化問題ニ付テハ米口ハ何レノ口トモ同盟
 其ノ他ニ政治的拘束關係ニ入ラサルヲ傳統トおシ居ルモ他口
 カ如何ナル口際約定ヲ結フトモ別ニ容喙スルノ限リニテハ唯日本
 カ歐洲ノ紛争ニ關與セラルルニヤ否ヤハ米口トモ無關心ヲ得ヌト

外務省

N-0034



連へるに付日本は獨持の地位を有し所謂全体主義を以て民主主義を以てアラスカ從テ全伴主義は曰フブロックの形成を以て或ハ歐洲ノ紛争に關與せんとスルノ意ナク唯「コミンテルン」ノ破壞工作ニ對抗シ又之ト一伴不可分の關係ニテサ蘇聯邦ノ侵略ニ備ヘサルヘカラス對獨伊關係強化ノ爲メ交渉を右ノ極ニ至シ外ナラスト證明シタルハル長官ハ米日ハ勿論從來「ポリニエビス」ハ排撃ノ方針ヲ採リ居リ日本ノ之ニ備ヘントセムハコトハ良ク了解スルニ唯軍事事項ト伴フ場合極東ニ於テハ其憂ナレトスルニ歐洲邊ニテハ或ハ又共ラ口實トシテ小口壓迫ノ具ニ

供スルモノナキヤラ懸念シ居レト語レリ
英ハ轉覆セリ
英ヨリ佛獨伊ハ轉覆アリタシ

外務省

N-0034

0331

(2)

總二九四〇七

昭和四年

(平)

華村 八月廿九日 陸軍省
本省 十月十日 陸軍省

阿部外務大臣

堀内大使

第八八九号

二十一日 紐育「タイムズ」華村通信ハ、鄂州ノ危機ハ、日英カ
省ノ注意ヲ、極東ヨリ、全然外ラシメ、吾ハ、譯ニ、アラスカ
協定ノ成立、防共、鐵線ノ有、解ニ、次ク、阿部外務大臣ニ、對スル
大命降下ハ、日本カ、英米ト、友好、關係ヲ、求ムルモ、ニ、シテ
意、呼、深シト、サレ、對、支、政策ノ、緩和、スラ、不、可、能ニ、アラ、スト、思
ラ、シ、右、傳、向、ハ、去、ル、二十、六、日、在、米、日、本、大、使、ノ、ハ、ル、江、川、官、訪

S. 14.1.4.0-1 52

同ニ、視、ハ、レ、タリ、即チ、方便ハ、長官ト、鄂州問題ニ、付、意見
ヲ、交換、シ、タル、後、日本ハ、決、シ、テ、ト、口、領、地、内、之、米、運、動、ヲ
支、持、スル、モ、ニ、ア、ラ、サル、ヒ、日、英、ヘ、タリ、大、使、ノ、話、ハ、如、ニ、止、マ、ラ、ス
日、米、間、ニ、一、層、緊、密、ナル、協、定、ヲ、結、ハ、ン、コト、ヲ、提、議、シ、タル
ヤ、ノ、説、ニ、付、テ、ハ、二十、八、日、ハ、ル、報、紙、ハ、記者、會、日、見、ニ、於、テ、斯
ル、コト、ハ、話、題、ニ、上、ラ、サ、ル、シ、ト、テ、日、英、間、之、ヲ、協、定、シ、タリ、日、本
カ、更、ニ、日、米、千、係、ノ、具、體、的、發、展、ヲ、求、ス、如、キ、詳細、ノ、申、入
ヲ、ナス、ヤ、否、ヤ、ハ、東、京、政、變、ノ、後、付、ク、ラ、後、シ、テ、要、ス、ヘ、シ、休、眠
中、ノ、ハ、ル、一、方、便、ニ、二十、八、日、口、移、有、ニ、視、ハ、レ、恐、ラ、ク、ニ、思、見

外務省

S. 14.1.4.0-1 53

N-0034

0332

ヲ傲ヤレタルモノナルヘキニ因シ長官ハ記者ヲ
 管内ニ召シ休暇中ノ方便カヨ務者ニ来ルコトハ当然
 ニテ餘リ之ニ意味ヲ附スヘカラストモヘタリキト報ス (3)

外務省

S 14.1.4.0-1 54

N-0034

0333

(3)

増書一〇七〇号
昭和十五年(平) 本省 本省 本省
昭和十五年四月六日 前記

有田外務大臣

陸内大臣

第五六九年(至急)

十七日彼口務長官ハ蘭印問題ニ関スル所見同答
フト四日頭ニ要旨左ノ声明ヲ為シ

余ハ日本政府ハ蘭印ノ現状維持ニ関心ヲ有スト、外相ノ
声明ヲ興味ヲ吟讀シタルカ、蘭印ノ状態ノ変更ハ多数ノ口
ノ利益ニ直接ノ影響ヲ生スヘク、全太平洋ノ口際關係
上重要ノ地位ヲ占ムルモノニテ、其ノ内政干渉又ハ平和的ノ手續

外務省

S 14.1.4.0 - 1 55

ニ依ラザル現状変更ハ蘭印方面ノニテハ太平洋全般ノ
安定平和並ニ安全ニ取リ有富ナルニ右論結ハ一般
通用スル原則ニシテ且一九〇八年十一月三十日日米交換公文
ニ依リ相互ニ太平洋ノ現状維持ニ関スル方針ヲ述ヘタル約
定中ノ原則ニ基クモノナルニテ且一九二一年十二月十三日
英佛日間ノ太平洋方面ニ於ケル島嶼タル地及島
嶼タル領地ニ関スル口條約中ニ同確認セ居リ且
一九二二年二月四日日南政府ニ通告セシニ依リ太平洋
方面ノ南領島嶼ニ関スル口ノ權利尊重方確保セシ

外務省

S 14.1.4.0 - 1 56

N-0034

0334

方面に於てハ民主共和兩黨ト大仲ハ此聲明ノ趣
或レテ唯一部ニ政府ノ方針ヲ更ニ詳細承知シテト希
望ナル程度ナリト傳ヘシ其ノ他新聞ハ和蘭政府發表
及東京ノ及郷音ヲ掲ケ居ル處全件トシテ我方ニ對スル最
初ノ先走リト見取扱ハ著シク緩和セシテ寧テ日米見解ノ
一致ヲ強能セトスルニ見受ケタリ
社説ノ語調ニ於テモ同様ノ傾向見ラレ紐育クタイムスハハル
聲明ハ日本ニ對スル比直ト解釋スル必要ナク長官自ラ日本
ノ聲明ハ現状維持ヲ希望シ英其他カ蘭印ヲ領有

スカラスト注意セルモノト認メ居リ實際日本トシテ支那事
變トテ聯聯ノ脅威トカ清算サレサル前ニ蘭印ニ進
出スルハ思ハレズ寧テ有田聲明ノ意味スル通り之ヲ弱
少口ノ手中ニ止メ置クヲ有利ト爲シ居ルモノナルヘシト論
シ「ボルクニアサン」ハ日本ハ英米ニ對シ警告者シ米ハ日本ニ
警告者シ米ハ日本ニ警告者シ結局日米双方トモ現状維
持ヲ正式ニ約束シタルノ感アリ唯兩口相互ノ猜疑ノ結
果本件聲明ヲ必要トシタルモノニテ將來事態ノ緊迫
セル際右聲明カ實行サルルコトヲ望マサルヲ得スト論ニ紐

N-0034

0336

其の「ヘラレド」トリビニ「日本ノ蘭印占領」ト言フカ如キハ
 現在ニ於テハ全然假説ヲ出テス其ノ際ノ米ノ出方ヲ
 豫想スルハ無意味ナルモ日本カ必要ニ太平洋ニ於テ
 戰争ヲ誘発シ此ノ上米ノ忍耐心ヲ試スニ在テハ米ノ孤立
 派ハ甚タレキ若境ニ立テハント論シ唯華府方面ノ「ホスト」イブ
 ニングスター等ハ相変ラス日本ノ蘭印進出ヲ疑フ前提ノ
 下ニ社説ヲ掲クルト共「米ノ忍耐ニモ限りアリト」云々
 「ホスト」ノ時評ヲ掲ケ存レリ
 伊蘭ハ轉賣セリ
 伊蘭ハ轉賣アリタルニ餘滿ハ「バタビ」アハ轉賣アリタル
 外務省

S 14.1.4.0-1 61

N-0034

0337

(5)

總書一〇五三二号

昭和十五年(暗)

昭和四月二十日午後
本省 三番後番

有田外務大臣

堀内大使

第五九三号(秘)

一、二十日日本使臣團長官、會見、際本使より、甘蘭印向題ニ付
 テ、有田外相ノ聲明ニ引續キ長官ヨリ、聲明ヲ發セラレタルカ、米紙
 ニ觀シタル所ヨリ、見ルニ米側ニ誤ルニ危惧存スルモノ、如ク思ハルト
 言ハルニ處、長官ハ以下述ノ所、新聞ニ發表セサレシ所ナルカト
 前通シ有田外相ノ聲明ニ付テ、日本ノ新聞中ニ、其ノ文面ト異
 レル意味ニ之ヲ解釋シ居ルモノアルカ、如ク思ハレ特ニ日々新聞ノ

如キハ右聲明ハ日本ノ東亞ニ於ケル、リベラリズムヲ要求スルモノナリト
 解シ、範圍印ニ付シ、經濟上ノ獨占的利権ヲ集中スルモノ、印
 象ヲ與ヘタリ、日本ニ於テハ東亞ノ「モンロー主義」ヲ主張シ居ルニ
 右ハ米ノ「モンロー主義」ト甚クシク異ルモノアリ、米ノ「モンロー主義」
 ニ對シテハ、何レ他ノ機會日ニ日本側ニ法陳シタキ考ナルカ之ハ
 政治的ノ安全ヲ求ムルモノニシテ、即チ米大陸以外ノ何レカノ曰カ、米大
 陸ニ於テ新政府又ハ權カヲ設定スルト、米大陸ノ安全ヲ
 害スルモノトシテ之ヲ容認セスト、極言ナリ、然ルニ日本ノ東亞「モン
 ロー主義」ハ排他的獨占的經濟利権ヲ主張セントスルモノナリヤ

N-0034

0338

二解セラレ来トシテハ之ヲ黙認シ得サルモノナリト述ハルニ付本復ハ
年日ハ「モンロー主義」ニ付深ク論議スル暇ナキ者田健ノ所見トシテ
述ハタキハ第一「日本ノ新聞」¹⁵議ル居ルト夫ハ其レモ政府ノ政策
ヲ代表シ居ルモノト言ヒ得サルハ勿論ノ事ニテ新報ノ政治家中個
人ノ意見トシテ東亞「モンロー主義」ヲ提唱シタル者アリシナラン又帝
口政府トシテハ斯ル主張ヲ正式ニ發表シタルコトナシ(續)

外務省

S 14.1.4.0-1

64

N-0034

0339

昭和十五年(略) 四月三十日午後
二時 陸省

有田外務大臣

堀内大使

第五九三号(極密)

一、第一ニ以上ノ英ハ別トスルニ日本トシテハ經濟上獨占的立場ヲ主張スルモノニアラス 有田外相ノ聲明ニ明カニ如ク日本ト葡國印トノ緊密重要ナル關係ニ鑑ミ三戰局ノ東亞ヘ波及ヲ防クコトノ利益ナルヲ明カニシタルモノニテ經濟的獨占ヲ口ニセルモノニアラス尚又貴長官ハモロニ主義ハ政治的安全ヲ目的トスト言ハルニ元來口實ハセヤリテイハ政治上一ニテラス經濟上ノ安定ヲ念ムコト勿論ナルニ又米ノ名目

外務省

主義ハ付見ルニ現ニ米洲安全地帯々海岸ヨリ數百哩ノ遠キ迄及ハシメントス等其ノ解釋ヲ擴張シシコトノ事實ヲ指摘セサルヲ得ヌ此ノ向路ニ付テハ今日且是以上深ク論議セサルヘキニ要スルニ有田外相カ過日聲明ヲ出シ名目取逐和葡本口カ歐洲戰爭ニ捲込マル場合閣下ノ保護ヲ外口ニ依頼スルノ風説ニアリタル為日本ノ態度ヲ明カニセルモノナリ幸ヒ去ル十六日和葡外相ハ葡印ノ保護ニ付米々何ニ對シテモ要求シタルコトナク又將來モ亦其ノ意思^思又何レカ外口ヨリ保護干涉ヲ申出タル場合於テハ是ヲ拒絶スル決心ナリト聲明スル所アリタル和葡兩國ノ日本側ニテ此ノ聲明ヲ第トシテ次第ナリ又米側ニ於テ

外務省

N-0034

0340

貴江官吉明。依少南印ノ現狀維持維持ノ方針ヲ明カニシテ見
 ハ結構ナリト言ハルニ對シ長官ハ米側トシテ日本カ支那ノ関門
 戶開放主義ノ維持ヲ聲シ聲明セシタルニ拘ラス其ノ後事實ノ
 發展ヲ見シ滿州ニテハ米人ノ高志員カ事實上不可能トナリ
 支那ノ占領地帯ニ於テモ同様ノ事能ク發展シタルニ鑑ミ南
 仰ニ付テモ同様ノ不安ヲ感シ居レリト述ハタルニ付本使ヨリ門戶
 開放ノ方針ニ付テハ本使ヨリ從來屢々説明シタルヲ通リ支那能
 テハ大規模ノ作戦行ハレ居ルニ付種々ノ障害アルニ最近ノ事
 態漸次改善セシレ我方關係官憲ニ經濟ヲ常態ニ復

外務省

S 14.1.4.0-1 67

スル爲最妥善ノ努力ヲ盡シ居ルニ以テ等ナリト説明シ置ケリ
 英、伊ハ轉覆ス
 英ヨリ佛、獨、白、甘、南ハ轉覆アリトシ
 甘、蘇、滿ハ轉覆アリトシ

外務省

S 14.1.4.0-1 68

N-0034

0341

米英対日親善傳裝

(外交調整米側申出)

昭和十五年一月有田外務大臣宛在米務務大使宛電報(暗極秘館長符号扱)

才七五号

最近ハ大使ヲ極ク内容ニ会见シテ午旨申出テ其所ニテ会谈セリハ本日ノ会见ハ本政府ノ訓令ニ止
非之全ク自介ノ思付ニ此際何等カ日米兩國係打崩シ道ヲ講ニ策ヲ探究スニ爲希望シテ其ノ一環頭シ

Equal statement & Equal Statement of the Record ヲ用意シ居リ別ニ日脱野村ハハハ会谈以後支那ニ

於テ秘生空爆侮辱及通商制限等ヨリ米ヨリ權益侵害事例列舉シテ書テ持参シタリ

ニ右 Equal statementハニ於テハ本大臣於テ先頭現状トニ於テ日米兩國係改善困難ト云ヒ(往電才一九七

号会谈等ニ言及ス)又自介ノ度々兩國親善關係恢復ノ爲ニ空爆侮辱及通商制限ヨリ在米米ヨリ權益侵害除去

カ先決條件ナリト申出居リタリ。實際ソレニテハ先介テ自介ハ此際持根本ノ親善關係ハ日本カ武力ヲ

以テ根柢的目的ヲ達成セトスル限リ之ヲ期待スルコトヲ得カトテ強調シ。米官民ハ從來軍縮ニ策遂行ノ具ト

シテ武力行使否認及平和的手續ヨリ外交調整維持等主義ヲ主張シ去リタルハ勿論自改亞兩大陸ニ於テ事與全世界

N-0034

0342

影響を予悲修ナル事能然生居ル也夫如前大戦以来右如予悲修事ノ再来ヲ防止去ト熱心ニ努力シ来ルヲ以テ
右如予悲修ノ主義ニ無関心ニテ武力ニ訴ルル家ノ之ヲ信賴ス又之ヲ親善關係ヲ維持スルハ不可能ナリ然レトモ米
小官民ハ日本國親善關係恢復ヲ歡迎ス今殊在現下ノ世界狀勢ニ鑑ミ重要事ナリ。若シ日本力誠意ヲ以テ政策
遂行ノ具トシテ武力行使ノ方針ヲ改メテ明確ニ證查テ夫如予悲修ノ同情ヲ以テ見止至ル今自分此如予悲修ノ日米國
係打用途南カレル確信ヲ有テ述テリ

三. Oral statement of the record 二於テハ本大臣力先般太平洋協會晚餐會ニ於テ世界新秩序建設爲ニ實
易障ヲ排除ス、英強調シテトニ共鳴シ普衆ハ閉鎖經濟ニ發展出来ルニシテ人ノ自由貿易ヲ強調シ居トリ

四. 依テ本大臣右貴見ヲ對テ追テ所見ヲ附陳スルコトアルモ閉鎖經濟ヲ非トスル英行テ原則上及精神上貴大使ト同感ナリ
尙會帝ニハ一部ノ誤解ヲ拘テ南印ノ對テ平和政策ヲ保持シ泰西ノ對テモ近テ相互領土專皇原則十二條約ヲ締
結セトシ又天津問題モ近テ解決ヲ見テ止ル史狀ニ在リ貴大使モ亦貴國力平和の在リテ諒解セルハシ唯貴大使

日米外交恢復ニ空想侮辱及通商制限等 除テ先決條件ト爲セ之等ヲハ合戰繼續行中今已今得テ其才ナル日米
外交改善上ヨリモ事更ニ且モ速カニ終結ヲ必要トスルモノナリ述ハテ貴大使ニ於テ右如予悲修ニ於テ日米關係改善上具體的
ノ suggestion ヲ持テ合意スルノ實固正ニハ別ニ具體案ヲ有ルニ非テ答ヘ以上本大臣所説ヲ事務省ニ報告シ居

支無ナト内ニ付本大臣右最後實因ヲ合々且若シ米如倒ニテ何等カノ具體案ヲ本大臣ニ於テ之ヲ考慮スルニ各
方ナルコトヲ附加報言方要議ナリ旨應酬シ置テリ

五. 尙本大臣右會見機會米如海軍太平洋洋集中ノ理由ヲ諒解スニ若シ米如旨ヲ述ハタルカ同大使ハ米如海軍ノ都合
ニ出ツモ之ヲ別ニ對日威嚇ニ非テ向座ヲ辯解ヲ爲シ尙前顯書ヲ物外廣田ハル間ニ交換セラレタル
ノ寫シモ親シ行テ之ニ因テ別段詳シキ説明モナリモ本日會見ノフレンシメント爲シトクマンカ吉沢局長ヲ未訪
シタル際日米關係現狀打南ノ形式ニテ同々ニ及シリトコトアルハ或ハハ大使ニ於テ何カ思ヒ奇リノ次第ナ
ルカトモ想像セル

米英、対日親善偽装

(日米外交調整米英對日親善見解ニ関スルオーネン・メモ)

昭和十五年七月二日有田外務大臣駐在米塚内大使宛電報(極秘・館長符号扱)

才三二二号(英文假訳)

客年閣下ノ降木際ノ當時ノ首相平沼男、貴方事務長官宛書翰ヲ閣下ニ托送セラレテ右書翰中ニ於テ平沼男ノ敬儀ノ人民ニ對シ甚大ナル苦痛ト文明ノ徹底的破壊トヲ招来スルニ至ルハ甚々悲惨ナル戦争ヨリ歐洲ヲ救フコトハ歐洲紛争ノ圏外ニ立ツ日本及米英ノ義務ナリ信スル旨陳述セラレリ

不幸ニシテ戦争ノ防止ニ関スル兩面間ノ協力ハ実現スルニ至ラザリキ然レモ余ハ歐洲戦争ノアメリカ及アジアニ及ボス不幸ナル影響ヲ最ノ限度ニ止ムコト最大ノ努力ヲ爲スベキナリト見解ニ於テ閣下ト全然同意見ナリ幸ニ閣下信今ニ基テ去ル九月歐洲ニ於テ戦争勃發直後不介入ノ政策ヲ宣言シ爾後右政策ヲ忠實ニ履行シ来レリ

日本ハ各国民々ノ所ヲ得テ吾等ニ於ケル平和ヲ維持セシメトテ希望スル我々外交關係上ニ基本的政策及原則ニシテ吾人總テ努力ノ右目的ヲ達成集中セラレリ而シテ平和維持ノ爲メニ我々正義・法律及秩序ノ原則ノ尊重セラルルニキト勿論必要ナリモ亦同時ニ各々カ世界ノ変化及実情ニ照シ互ニ他カノ地位ヲ斟酌スベキナリ

N-0034

0344

モ必要ナシト信ス平沼男ノ「ワシントン」氏宛書翰中「六戰前歐洲ニ於ケル及日ノ原因ニ因テ止ル如キ一節アリタリ又
方ニ言分ナルキモ世界大戰以後歐洲情勢ヲ冷靜ニ檢討スルニハ独逸及伊太利ニ對シテ層々及耐ヲ要望セラレト雖モ
英及米ノモ亦再考スル莫キ有之タリトノ結論到達スルヲ以テ諸國正ノ餘地ナキ過マテ事態ニ因テモト云ヘ
茲ニ之ヲ錄込タルニ於テ無用ニ非ルシ

日本、常一人及商品自由ヲ移動ヲ主張スルモ右原則ニ遺憾ナク之ヲ履ムルモ日本苦境ニ陥ルル餘儀ナクモレタリ
移民制限スルニ市場輸入ニ便宜依リ開放スルニ内鎖セラレ又日本ハ必要物資ノ輸入ハ輸出ニ依テ禁止スル制限ヲ
レタリ此等諸國ハ各自ニ必要ニ基キ單ニ時的措置トシテ手段ヲ採リタルモ料モ實際ニ於テ日本ハ内貿易ニ
限度ヲ爲海外市場ニ求メテ得ス又種々物資及原料ニテテ海外ヨリ輸入ニ依存セサルヲ得サル關係上堪ヘ
難^ナ備^ナ勢^ナニ直面シ右ノ事情ノ下ニ於テ又特ニ箇年ニ互ニ支那ノ一大紛争ニ依リ招来セラルル異常ナル事
態^ナノ下ニ於テ日本力貿易ノ根本原則トシテ無差別主義ヲ堅持スルニ云ハ隣接諸國及諸地域ト固^ク或ハ特殊ノ貿易
關係ヲ保持スルニ云々得ルモナリ

一九四〇年三月二十八日

N-0034

0345

宋英対日親善傳裝

(日米外交調整案)

昭和十五年七月一日有田外務大臣在木堀内大使宛電報(極秘・館長符号板)

才三二三号(英文假訳)

六月十日及十九日會議繼續トシテ左ノ如クニ基テ外交交渉依リテ兩國政府間ニ諒解成テ可能性有無ニ付檢討スルヲ提議ス

諒解基礎トシテ前提兩國利益ニ因テ歐洲戰爭影響ヲ最少限度ニシテ存ス

公定案ニ於テ兩國太平洋地域ニ於テ歐洲交戦ニ領土及屬地ニ因テ平和的手段依リテ變更ヲ加スル場合ヲ除キ右領土及屬地現狀ヲ維持スルコトヲ希望スルトシテ合意ヲ表明セリトス 右領土及屬地ノ現狀ニ因テ問題發生シ何レカ

一方ノ政府ニ於テ協議ヲ希望スル場合ニ兩國政府間ニ協議スル旨ノ規定ヲモ公定案中ニ設ケトス

我政府ニ交換外交力太平洋全地域ニ於テ歐洲交戦ニ領土及屬地ヲ包含スルコトヲ了解ス

右提案兩國關係ニ於テ特殊問題ニ因テ從前立場撤回ヲ意味ストル解致セザルベキニ非ズ且意味スルモ非サルコトヲ

理解シ且當時留意スベキナリ

本件ニ因明瞭ナルト太平洋ニ於テ一般情勢一新ニ困難 摩擦及紛議ノ可能性ノ導入ヲ防止セトスルコトナリ
右ノ修正的措置ヨリ寧ロ平防的措置ヲラシメトスルモナリ
吾人同時ニ實際上情勢改善ノ可能性ヲ包蔵セシテ一般情勢悪化ヲ防止スル所以ナリトテ日本側ニ於テ認ムコトヲ信シ
且希冀スモナリ

吾人ハ右ノ段ヲ講ギルニ於テ一般民衆向ニ瀟漫ニ各種疑心ヲ緩和シ又各種氷登的言動ヲ抑止スルニテ
信ス

輿論ノ建設的且平和的方法ヲ考慮スルニ至ルシ

日本及米政府間ニ過去及現在ニ於テ論議ノ主題トナレド多数ノ特殊問題ハ前記ノ段ニ依リテ處理スルニテ限ラズ
左ノ段ヲ講ギルニ於テ本件ト明瞭ニ關係ヲ有スル特殊且將來ノ問題ハ考慮スルニテ又他ノ諸問題ノ解決ニ從
進スルニ

一九四〇年六月二十一日

米英対日親善傳装

(米側申出)

昭和十五年七月十三日有田外務大臣宛在米塚内大使宛電報(暗)

才三五〇号

往電才二〇号(関)

十日、カール大使大要別電才三五〇号、如キ非公式書物ヲ持参シ左自分ノ本邦在任中提出スル書物中最モ満足スルキモノヲ考ルモノニシテ貴大臣ニ於テ *between the lines* ヲ讀ムルニテ希望スル前提シテ之ヲ年々シ且本邦政府ヨリ右ノ交際際於テ自分ノ心得トシテ電報シ未レモノ寫ヲトシ大要別電才三五〇号ノ如キ書物ヲ提出シタリ

六右ニ対シ本大臣ハ追テ研究上坐方ノ見解ヲ申述フキモ只一莫而尋テ敷シ度トシテ對蔣援助停止ニ関スル態度何右從来ノ態度ヲ變更セトシ意味ナキト實向シテ公自分トシテ右書物以外ニ云フキトシテ答ハルヲ以テ日本ハ自佛印及「ビル」ト停止ニ努力シ未レル処右「ビル」トニヨリ蔣側ニ送スル物資内大部分ハ米及食糧物ニシテ自援蔣行キ大正後目ヲ努メ若ル米ソノ兩方ニシテ日本トシテ米及食糧側對蔣供給停止ニ重キヲ置ケル才ナリト述(タルニカハ米及食糧對支供給ヲ停止スル時ハソノ對日供給問題モ亦考慮セラルカヲ占トナルニ答ハ居タリ)

S 14.1.4.0 - 1

76

N-0034

0348

米英對日親善傳狀

(米側申出)

昭和十五年七月二十日有田大臣發在米塚內大使宛電報(暗)

米三五号(館長符号扱)

一、日米兩國、如于貿易上重要諸事、歐洲戰亂ハノ結末如何ヲ因テ甚ク重大事ニシテ特ニ右兩國ハソノ並細重及米洲諸國ニ對シテ多大ノ貿易關係上之等地域ハ歐洲戰亂波及ニ付共同利益關係ヲ有ス。又日米間ノ三付モノ貿易ハ多額且相互補充的ナルカ此如キ健全且有リナル通商關係ハ、アウタレキ一ノ制度トシテ於テ其繁榮ヲ期待シ得サルト共、兩國カ私有財産權尊重ヲ以テ社會經濟組織ノ基礎トシ居ルコトモ注目價ス。

二、合米洲及亞細亞(或諸島)南於資本ヲ必要トシ米ハ右資本ヲ有ストモ資本ノ性質上勿論危險ヲ避ケ秩序及安全等ノ存在スル地域ニ擲口ヲ求ルモノナリ而シテ日本ノ如キ貿易依存スル國家ハ近隣諸國ト特別貿易形態ヲ保持スルモノモ出來得ル限リ廣範圍ニ機會均等及無差別待遇ノ原則ヲ適用スルコト利益アリ。

三、日本ハ且ト通商企業及移民問題ニ關シ南及南印政府ト交渉中ニ越シカ米ハ南印ト對シテ重要ナル貿易及企業關係上他國ト對シテ同様同地方ニ於テ通商及企業上ノ機會均等主義遵守ノ原則ニ關心ヲ有スルヲ以テ交渉ヲ付通報ニ接シ

N-0034

0349

アトヲ希望ス

四 米側提議太平洋内交戦に屬領等ノ現状維持商公外交換日本側見解ト異リ寧ロ日本歐洲戰事不介入態度ヲ密固ナラシムシ米公左ヨリ歐洲戰乱ノ太平洋ニ對シテ影響ヲ縮クシテ安定ニ貢獻セシムルモシテ右ニ付同地感ニ於テ重要ナル關係ヲ有スル日本好意的考慮ヲ要請スルナリ

五 閣下カ六月十日提出セラレタル日本ノ經濟政策對支及對南洋政策諸問題(往電才六三三号参照)ハ勿論重要ニシテ等ノ諸問題ノ明確化カ日米間暫定通商協定締結ノ必須條件ナリ以テ日本政府ノ現存ノ通商制限ハ一時的モナリト声明具體化カ速カニ實現セラレムコトヲ望ム

六 對蔣援助停止ニ付テハ重慶政府カ米公承認ニ政府ガアト暫ク措モ米公政府ハ支那民眾大半ノ眞支持ヲ受ケタル指導者ヲ承認スル非ハ支那統一政府ノ強固性實現見込ナシト意見ヲ有ス

七 日本ノ世界平和ノ爲メ日米協力ニ固ク希望及日本ハ東亞ニ於テ安定勢力ナリト理想ハ米公政府ガアト承認スルハ勿論平和的手段ヨリ代テ關係ニ權益ヲ尊重シテ世界ノ何レノ地域ニ於テ秩序正義及安定ヲ齎スルカ如キ政策ニ對シ同情シテナリ。斯如キ政策各ヨリ完全独立ニシテ他ヨリ自由ニ通商シテ健全ナル諸關係ヲ樹立セシムルニシテ強カク以テ他ヨリ經濟的ハ政治的ニ支配セシムル政策ハ正反對モナリ

米英對日親善偽裝

(米側申出)

昭和十五年七月十三日有日外務大臣宛在米坂内大使宛電報 (暗)

才三五二号 (極秘) (館長符号秘)

一、合日本政府カソノ將來ノ通商政策ヲ明白ニ且右カ米見解ニ合致スルニ於テ本會談促進セラルルニ根本問題上ノ主要難矣解決セラルルハ小問題ハ適宜整理スル除キタルニ

二、太平洋内ニ戰事屬領等現狀維持ニ関スル公之交換ニ特ニ太平洋上ノ新問題發生ヲ回避セリトスルモニテ平等ノ變化防止措置進テ疑惑ヲ解消與論改善等ノ貢獻ニ當該特定問題ヲ解決スルニ至ラズ日米間他諸問題ノ解決ヲモ

容易ナラシム

三、日本ハ自己ノ無ク次ニ個々根本問題ニ決定ヲナサレハカラナラシム

(1) 日本ハ自己ノ一時的利益ヲ多ク現ニ疲弊シ且低度ノ生活標準及生産力ヲ有スル地域ノ商業及資源ヲ確保利用スル止ラナカク或永久的利益ヲ蓄メテ自由並未開地域ノ經濟建設上他ニト協力シテ一切ノ技術・資本及進歩的經濟指導等ヲ利用スナキ

S 14.1.4.0 - 1

79

N-0034

0351

四右ノ内縣ニ日本ハ武力ニ依ル領土獲得政策ヲ堅持ス諸島ト協調スナキヤ。武力政策ハ占領地域ヲ貧困ナラシメ且資本及技術ノ利用ニ進歩的社會經濟發展上他島ト協力ヲ不可能ナラシメ

N-0034

0352

昭和十五年(六一三) 華府三月七日後記
本府 八日後著

(平)

有田外務大臣

堀内大使

第三二九号

往慶号三〇三号(三三)

七日聯邦代目付管理官の輸出銀行、支那ニ千
万弗丁採ニ一千万弗「アイスランド」ニ百万弗「クレタ」
ヲ供與スルニ決シタル日記者會見ニテ説明セリ了

外務省

S 14.1.4.0-1 81

昭和十五年(六一四)

華府三月一日後記
本府 後著

(平)

有田外務大臣

堀内大使

第三四〇号

往慶号三二五号(三三)

七日、記者會見ニ於テ聯邦代目付管理官ノ説明
依テ輸出銀行「クレタ」ヲ引当ニ米ヨリ輸出スル
大豆、小麦、苜蓿、肉桂、ライ麦、大麦、豚脂、
棉花、大豆油「トラクター」羊皮「トナリ」
蜜蝋等ニシテ

外務省

S 14.1.4.0-1 82

N-0034

0353

丁林及「アイズラト」に關しては主として農産品に對する支那
 二國に對する大商會の路建設設備に對する等々
 之力を拂はせしめ、對米輸出を促進せしむるに努むる
 細意へ郵送せり

外務省

S 14.1.4.0-1 83

支那に二千万ドルのクレジットを供與せしむるに關し
 公電

N-0034

0354